

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 23 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370780

研究課題名(和文) 幕末期長州藩における洋学の受容と実践 - 対外的危機意識の結集と洋式軍艦の建造 -

研究課題名(英文) A study on the acceptance and practice of Western Studies and military science in the Choshu Domain during the late Edo period:

研究代表者

小川 亜弥子 (OGAWA, Ayako)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70274397

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幕末期長州藩における軍事科学的洋学の受容と実践の様相について、造兵というハード面から研究を進めた。具体的には、洋式軍艦建造に関する長州藩の政策決定過程、洋式造船に関する長州藩の知識・技術の習得過程、洋式軍艦「丙辰丸」の建造過程、その後の活用の実態などを解明するとともに、洋式海軍の建設に中心的な役割を果たした松島剛蔵に焦点を当て、剛蔵の洋学知識の実践、政治的活動、及び人的ネットワークなどについて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the acceptance and practice of Western Studies and military science in the Choshu Domain during the late Edo Period from the viewpoint of manufacturing weapons. Concretely speaking, this study has two principal aims. The first is to clarify the following matters: 1) Choshu Domain's policymaking process concerning the construction of Western-style naval vessels, 2) their acquisition process of related knowledge, and technology concerning the construction of Western-style warships, and 3) the construction process of the Western-style warship Heishin Maru as well as its subsequent activation and practical use. The second is to focus on Gozo Matsushima, who played a central role in introducing the Western style into the navy of the Choshu Domain, and to clarify his use of Western Studies, his political activities, and his personal networks.

研究分野：洋学史

キーワード：洋学史 幕末期 長州藩 造船 海軍 松島剛蔵 尊王攘夷

1. 研究開始当初の背景

幕末・維新时期における長州藩の研究史は、明治維新を理論化する上で重要な位置を占め、現在までに膨大な量を蓄積している。取り分け、政治史・経済史の視座からの研究は、著しい進展を遂げた。

こうした研究状況の中で、研究代表者は、これまで一貫して、洋学史という別の視座から当該期の長州藩を焦点化することに努めてきた。このことは、長州藩明治維新史研究の欠落を補うものであると同時に、幕末洋学史研究の空白を埋めることにも繋がるものである。

しかしながら、上記のような研究代表者による一連の研究には、二つの方法論上の問題が内在していた。第1は、長州藩における洋学の軍事科学化について、ソフト面(用兵・軍制)という一方向からのアプローチに終始し、ハード面(造兵)からの分析視角が希薄であったこと、第2は、長州藩の軍事科学化と密接な関係にある軍制改革について、陸軍の兵制改革に重点を置き、海軍の兵制改革に関する視座が不十分であったことである。

したがって、本研究では、長州藩の軍事科学的洋学の受容と実践の過程をハード面(造兵)から検討するとともに、洋式海軍の建設や兵制改革に中心的な役割を果たした人物に焦点を当てることとした。

2. 研究の目的

科学技術史上、幕末期に西洋との技術格差が著しかったという点では、造船に勝る分野はないといわれている。この点を視野に入れ、本研究では、安政3年(1856)12月に長州藩が完成させた「丙辰丸」に注目した。「丙辰丸」とは、長州藩にとっては、自藩製による初の洋式軍艦であるとともに、我が国においては、一つの藩単位で初めて建造に成功した君沢型の洋式船でもある。具体的には、洋式軍艦建造に関する長州藩の政策決定過程、長州藩における洋式造船知識・技術の習得過程、「丙辰丸」の建造過程、その後の活用の実態などの解明を目指した。

更に、本研究では、長州藩の洋学史上、欠くことのできない人物の1人であり、洋式海軍建設に重要な役割を果たした松島剛蔵に光を当てた。松島剛蔵に関する基本情報については、『殉難禄稿』をはじめとした人名辞典、『防長医学史』などの医学関係史、『阿武郡志』などの自治体史から得ることが可能である。これらの書籍の編集の性格上、松島剛蔵という人物の記述が最大公約数的に止まることは、避けがたい必然であろう。しかし、裏を返せば、剛蔵を辞典的把握のもとに据え置き、その後も十分な検討を加えないまま放置する、という現状を生んでしまったともいえる。このような研究状況を踏まえ、本研究では、長州藩の西洋兵学者であり尊皇攘夷派でもあった松島剛蔵の足跡を忠実に再現し、剛蔵の実像に迫ることとした。

3. 研究の方法

(1) 第1次史料による洋学史研究

これまで、長州藩の洋式造船事業については、末松謙澄『防長回天史』の記述を基に叙述がなされてきた。しかしながら、同書には誤植が多々あり、引用史料についても、その多くが出典を示していなかったことから、史料上の制約が大きな問題となっていた。

こうした状況を克服するため、本研究においては、山口県文書館を中心に、洋式造船に関する史料を収集し、これを解読して新たに活用した。

(2) 政治史とリンクさせた洋学史研究

近年、洋学史研究は、質・量ともに充実を見せ始めているが、その一方で、科学史・技術史・医学史・学術史などの各分野における基礎的・個別研究の羅列、という状況に陥っている。

こうした状況を克服するため、本研究では、洋学を一つの歴史的存在にとらえ、その歴史的性格を明らかにすることを試みた。具体的には、幕末期長州藩の藩政改革、就中、海軍の改革に関する実態の解明に有効な史料を収集し、これを解読して活用した。

4. 研究成果

(1) ペリーの来航と大船建造禁止令の解除

嘉永6年(1853)6月3日夕刻、兼ねてからの予告のとおり、ペリーの率いる軍艦4隻が江戸湾入り口の浦賀に現れた。ペリーは、軍艦と大砲による軍事的威圧を背景に、アメリカ大統領国書の受理を迫った。やむなく国書を受け取った幕府は、回答を来年に先延ばしすることで、いったんペリーを退去させた。ペリーの来航情報は瞬く間に全国に伝わり、外圧に対する危機意識が日本を覆った。

幕府にとってペリー来航の衝撃は、来航それ自体もさることながら、外国船の江戸内海侵入により、その無防備な状態が露呈したことであった。洲の多い内海に大型外国船が侵入することは不可能であるというのが幕府大勢の考え方であり、事実、これまで外国船の内海侵入という事態は発生しなかったからである。以後、幕府の海岸防備強化策は、軍艦と大砲の拡充が喫緊の課題であるとの認識のもと、軍備拡張に向け急速に舵取りがなされていく。

軍艦の拡充については、洋式軍艦の導入が眼目に掲げられた。ペリー艦隊の退去から一週間後の嘉永6年6月19日、幕府は、7、8隻から10隻の艦船をオランダに発注することを決定し、翌日、長崎奉行水野忠徳に交渉を命じている。更に、幕府は、同年9月15日、寛永の発令以来217年目にして大船建造禁止令を解除し、諸藩に洋式軍艦の建造を勧め、造船の方法・隻数を調査し申請するよう命じた。

諸藩の洋式軍艦建造に関する幕府の基本方針については、これを強要しない、という

ものであった。ただし、川越藩・忍藩・会津藩・彦根藩に代わり、嘉永6年11月14日に江戸湾警衛を命じた藩については例外と位置付けられた。江戸湾入り口の相州側の警衛を担当する長州藩と熊本藩、房総側を警衛する岡山藩と柳川藩、武州本牧警衛の鳥取藩の5藩である。幕府は、安政元年(1854)2月22日、長州・熊本・岡山・鳥取藩に対し大船建造の取り調べを命じ、柳川藩には小型洋式船の建造を促したりするなど強い姿勢を示している。ペリー艦隊の再来航に備えるためにも、江戸湾防備体制の強化は焦眉の問題となっていたからである。

萩藩では、大船建造禁止令の解除を受け、嘉永6年9月19日、江戸の藩政府が国元の藩政府へ書を寄せ、大船建造に着手すべきか否かを検討することとなっていた。その後、長州藩は、同年11月の相州警衛発令により国元から相模国への軍事動員を余儀なくされ、翌安政元年2月、大船建造を前提にその製造方法の取り調べを命じられる。しかし、この時期の長州藩は、相継ぐ風水害や莫大な相州警衛費支弁に汲々としており、これ以上財政を逼迫させる大船の建造については消極的な対応をとらざるを得なかった。大船建造、即ち、洋式艦船の建造が藩議として決定されるには、実に、安政3年2月まで待たなければならない。

(2) 桂小五郎による洋式軍艦建造の建策

海岸防備のためには急ぎ洋式海軍の創設が必要であり、艦船建造が当面の課題となることは、長州藩の藩政府首脳陣も十分に認識していた。しかし、相次ぐ風水害や莫大な相州警衛費支弁による財政逼迫の折り、建造の経験もデータも持ち合わせていない現状にあっては、具体的な対応策を講じることはできなかった。藩政府のこの重い腰を上げさせたのが桂小五郎であった。

桂小五郎は、嘉永5年(1852)9月に江戸での私費剣術修行が許可され、斎藤弥九郎の練兵館に入門していた。ペリーの来航は、彼が江戸に出て7か月余りのちのことであった。小五郎は、弥九郎の仲介により伊豆葎山代官江川太郎左衛門の従者となり、品川砲台の建設現場に同行して見学・調査を行うとともに、新銭座の江川塾に入門し洋式砲術の修業に励んだ。

嘉永6年11月、幕府から相州警衛を命じられた長州藩は、桂小五郎に当地への出勤を命じた。小五郎は、これを好機ととらえ、浦賀の組奉行与力の中島三郎助と師弟の契約を結んだ。中島三郎助は、で、ペリー来航の折に副奉行と称し最初に交渉に当たった人物で、ペリーの艦船に数回往来する間に、船体構造の実地見学の経験も有していた。更に、三郎助は、幕府が建造した最初の本格的洋式軍艦鳳凰丸(3檣バーク)の総指揮役を勤めていた。小五郎は、三郎助の下へ日参し、艦船建造のため情報収集に力を尽くした。

この時期、薩摩藩は、嘉永6年12月5日に軍艦15隻(うち蒸気船3隻)の建造計画を幕府に申請し、同月20日に許可を得、これに着手していた。そのうちの1隻である昇平丸は、翌安政元年(1854)4月に進水、同年12月には完成を果たした。長さ15間、幅4間1尺、深さ3間、備砲16門の洋式軍艦(3檣バーク)であった。同艦は、安政2年8月に幕府へ献納され、長崎での海軍伝習に使用された。水戸藩においては、旭日丸の建造に成功していた。安政元年1月2日に江戸の石川島で起工、同3年5月に横浜で竣工、長さ23件1尺、幅5間1尺、深さ4間の洋式艦船(3檣シップ)で、専ら同藩の輸送船として用いられた。こうした中で、長州藩は、三方を海に囲まれ西日本の喉元である馬関(下関)を有しているにもかかわらず、洋式軍艦の建造計画さえ立てられない状態にあった。

安政元年11月4日、駿河・遠江・伊豆・相模一帯をマグニチュード8クラスの大地震が襲った。これに伴う津波により、ロシア使節プチャーチンの率いる軍艦が岩礁に打ち揚げられ大破し、航行不能に陥った。日魯和親条約交渉のため伊豆下田湾に停泊中であつたディアナ号である。同艦は、長さ52メートル、2,000トン、備砲52門、乗員約500名を収容するロシア最新鋭の軍艦(3檣フリゲート)であった。相州警衛のため浦賀に近い宮田の陣営に詰めていた桂小五郎は、同月12日から17日まで下田周辺に滞在し、その様子を陸上から調査するとともに、人々の見聞をもとに軍艦ディアナ号の簡単な見取り図を作成していた。当時はクリミア戦争の最中で、イギリス・フランス両艦船の目を忍んで艦体を修理する必要があつたことから、伊豆半島西北の君沢郡戸田湊がその場所に選定された。しかし、ディアナ号は戸田湊への回航途中に沈没し、乗組員等は帰国の手段を失って孤立した。プチャーチンは、ロシア本国に救助を求めため、幕府の許可と支援のもと戸田の船大工や住民の協力を得て、小型の洋式船を約3ヶ月で完成させた。これが、安政2年3月に竣工し、プチャーチンが戸田の船大工や住民への感謝の意を込め命名した「ヘダ号」(2檣スクナー)である。幕府は、洋式造船技術を習得した船大工に、同型6隻の建造を命じた。この型のスクナーは、長さ12間3尺、幅3間2尺、深さ8尺5寸で、安政3年4月26日には地名にちなんで「君沢型」と名付けられた。

安政2年4月初旬、桂小五郎は、病氣療養を理由に帰藩している。小五郎の帰藩の理由は、病氣療養を表向きにしていたものの、実際には洋式軍艦建造の実現に向け具体的な準備に取りかかるよう藩政府に要請するためであった。中島三郎助という洋式軍艦建造の専門家に師事していた小五郎の説得は、ここにおいてようやく藩政府の重い腰を上げさせた。

(3) 技術者の招聘

安政2年(1855)6月末に浦賀に戻った桂小五郎は、国元から大船製造の命を受け派遣されてきた御手大工(船方)藤井勝之進と船大工藤蔵を中島三郎助に紹介するとともに、三郎助の仲立ちで、幕府の軍艦鳳凰丸製造に従事した船大工棟梁勘右衛門の下に二人を入門させた。小五郎自身は、再び、三郎助の下で寄宿生活を始めることとなる。ところが、幕府の第1次オランダ直伝習生として三郎助が長崎に派遣されることとなったため、小五郎は三郎助から戸田の造船所に向かうよう勧められるとともに、これを機に同型のスクナーを建造することが得策であると教示された。ここに、洋式造船の具体的な方向性が明らかとなったため、同年8月(日不詳)桂小五郎は、直ぐさま江戸留守居役榑崎弥二兵衛を通じて、戸田の船大工の招聘と造船所設置の必要性を藩政府に建白した。

この時期の長州藩は、藩地では藩主敬親の江戸参勤の準備に追われ、更に、敬親が10月3日に江戸藩邸に到着してからは、その前日に発生したいわゆる安政の大地震の後始末に当たっていたため、小五郎の建白への指令を後回しにせざるを得なかった。しかし、震災の収拾に目鼻がつくと、藩政府は、直ちに小五郎の建白を容れ、スクナー君沢型建造のための準備を開始した。

まず、江戸の藩政府は、同年11月17日に国元の藩政府へ書を寄せ、三田尻の小船頭で船大工棟梁の尾崎小右衛門の出府を要請し、同月20日には桂小五郎に戸田の造船所を視察するよう命じた。小右衛門は、藩地での御用を急ぎ済ませた後、翌安政3年1月19日に出立し2月7日に江戸に着いた。既にこの時、戸田の造船所においてはスクナー6隻の建造が終了していたため、藩政府は小右衛門に対し、その製造方法や手続等について至急調査するよう指示を下した。小右衛門による情報収集の結果、幕府の若年寄本多忠徳の家臣である船大工棟梁高崎伝蔵と船大工藤吉が戸田造船の経験者であることが判明した。問題は、伝蔵と藤吉の二人への接触方法が見つからないことであった。これについては、小五郎の剣術の師である斎藤弥九郎が本多邸に出入りし、しかも伝蔵と懇意であったことが解決の糸口となった。即ち、本多家の家老であり幕府の軍艦製造御用を勤めていた星野覚兵衛に諸事頼みこむよう、小五郎が弥九郎に依頼したのである。

尾崎小右衛門は、高崎伝蔵と藤吉にスクナー君沢型の製造方法を直接質問し回答を得るとともに、伝蔵の計らいで、品川沖に碇泊していた同型船を密かに実地見学し、この模様を詳しく江戸藩邸に報告した。これを受け、藩政引請引家老として藩主に随従していた浦鞆負は、自らも同型船を見学することを希望し、同年2月9日、星野覚兵衛と伝蔵の斡旋により、小右衛門の案内で梨羽直衛・林

主税・坪井九右衛門・中川宇右衛門・赤川太郎衛門・河野弥兵衛・河野市郎等を伴い乗船し視察を果たした。藩主毛利敬親は、浦鞆負から君沢型のスクナーの堅牢な構造を聞き、同型船の建造を決定した。同月11日には、公儀人有福弥七を通じ、正式に本多家との間で高崎伝蔵の招聘交渉が成立するとともに、小右衛門に「スクー子ル船製造御用掛」の命が下った。

西洋との格差が著しい造艦技術の習得は、一朝一夕になされるはずもない。長州藩は、技術者の養成には時間を要するため、差し当たり技術者の招聘という手段を選んだ。確実にしかも手っ取り早い技術「購入」ともいえる。ここにおいて、桂小五郎の建白はようやく実を結び、次の段階、即ち、スクナー君沢型建造の実務の段階は小右衛門にバトンタッチされることとなった。

(4) 洋式軍艦の建造

安政3年(1856)4月15日、尾崎小右衛門は、高崎伝蔵を伴い萩に到着した。伝蔵の下には、戸田造船に携わった戸田村出身の船大工藤吉以下3名が集められ、それぞれに造船術、鋼索・タール術、運用術の技術指導を担当させることとなった。彼ら一人当たりの費別賃金は、銀16匁5分での契約となった。造船所の設置場所については、萩の小畑浦北端の恵比須ヶ鼻新湊が選ばれた。同年六月頃までには、造船に必要な諸施設が次々と建設されている。この間、三田尻・浜崎の船大工九人と浦鞆負の給領内の船大工三名による造船所出勤願いが許可されるとともに、各宰判から合計48名の船大工が召集されていた。

同年5月23日よりバッテリー(短艇)の建造が始められている。バッテリー(短艇)の製造については、幕府への届け出が不要であったため、スクナー建造の手始めとして手掛けられていたものであった。バッテリーの完成を目前にした6月24日日、国元の藩政府は、浦鞆負が中心となって幕府へのスクナー建造の届出書を作成し、江戸の藩政府へこれを送るとともに、幕府の御内用方と相談しながらその内容を検討するよう伝えた。幕府による正式な造船許可は、同年10月31日に下された。

長州藩が君沢型のスクナーの建造を開始したことは、直ぐさま諸藩の間に広まった。同年11月26日には、田原藩より家臣萱生玄順のほか鍛冶師富田小吉・船大工来太郎が派遣されてきた。田原藩の江戸詰めの藩士松岡次郎が浦鞆負の家臣秋良敦之助を介し依頼したことで、実現に至ったものである。元順は、恵比須ヶ鼻造船所の見学と造船技術の見習いを請うとともに、藤吉以下の戸田造船経験者の田原藩への雇い立てを願い出ている。藩政府は、いずれの要件も呑み、元順らを厚遇した。

同年12月13日、スクナーの艦体が完成し、同月17日に進水式を挙行、翌安政4年

2月5日には2本の帆檣を建て、内・外装ともに総ての装備が整った。同艦には、ホート・ホイッスル砲1門、6斤軽架砲5門、同ランケ架砲2門、車座付き6ポンド砲1門が装備されることとなっていた。船長は8丈1尺、幅2丈1寸5歩、深さ1丈3寸で、総工費は金100両1歩1朱、同14貫252匁2分5厘、銀202貫564匁8分5厘7毛であった同年3月29日、同艦は、安政3年丙辰年間に起工・完成したことになみ、「丙辰丸」と命名された。幕府を除けば、藩単位で最初に建造された君沢型スクナーであった。

5) 松島剛蔵による洋式海軍の建設と改革

海軍の場合、陸軍に比べ学理と実践の隔たりが大きい。海上での活動は天候の影響を大きく受けるため、急変を察し軍艦を自在に操縦するには、長期にわたる訓練と深い経験が必要とした。長州藩の洋式海軍の建設や兵制改革において中心的な役割を果たした松島剛蔵に関する諸事実を総括すると、次の通りである。

天保2年(1831)に7歳の時に、長州藩の本藩である萩藩の鍼医という家業を継いだ松島剛蔵は、その後、坪井信道のもとで蘭学を研鑽し、医学所好生館の西洋原書頭取役を務めたり、西洋学所の師範役に就任したりするほどの蘭書翻訳の実力を発揮した。更に、安政2年(1855)9月には長州藩初の長崎直伝習生となり、オランダ教師団からいち早く西洋軍事知識を学んだことで、長州藩屈指の西洋兵学者としての地位を築いた。長崎から帰藩した剛蔵は、西洋学所を改組して医学所好生館から独立させることに邁進し、博習堂の成立に力を尽くすこととなる。安政6年8月に開校した博習堂は、藩の陸海総合的な西洋兵学研究教育機関として、藩校明倫館と同様の教育組織を持つに至り、軍制改革を知識面から支える重要な存在となった。

松島剛蔵による洋学知識の実践については、長州藩の陸・海軍のうち、主として洋式海軍の建設において発揮された。剛蔵は、万延元年(1860)に、君沢型のスクナー丙辰丸に乗り、長州藩で初となる江戸への遠洋航海を成功させると、以後は、海軍士官教育の最終段階に位置付く実地の航海訓練に意を注ぎ、藩地と長崎・江戸を頻りに往復した。剛蔵の悲願であった三田尻御船倉の改革、即ち、海軍局の開設は、文久3年(1863)11月に至り漸く実現した。海軍局の設置そのものについては、既に文久元年9月に藩主毛利敬親の決裁が下っていたが、当時の長州藩は、中央政局への進出の最中で、藩の政治方針の確立に専念する必要があったことから、この件を一時保留とせざるを得ない状況にあった。こうした中で、文久3年5月の攘夷行動に対する外国船からの反撃によって、長州藩の海軍力は、一瞬にしてことごとく失われてしまった。しかし、このことが起爆剤となって、海軍局開設の動きが加速した。海軍局頭

取に就任した剛蔵は、「海軍局御改革大綱領」を掲げ、海軍兵制の担い手の質的転換(船手組の実質的解体)、海軍施設の整備・拡充(ドック・工場・弾薬調製場の新設)、及び海軍教育の基盤確保(三田尻海軍学校開設への布石)の3点を柱に、その実現に向けて粉骨砕身した。続いて、剛蔵は、元治元年(1864)3月、4国連合艦隊による本格的な報復攻撃に対応するため、防衛の要衝で海軍の拠点でもある三田尻の警備体制の強化に力を尽くした。

一方、松島剛蔵は、政治的な活動にも積極的であった。万延元年7月には、桂小五郎とともに、水戸藩有志との間で、いわゆる「丙辰丸の盟約」(「成破の盟約」)を結び、文久2年11月には、久坂玄瑞らとともに御楯組を結成し攘夷血盟に名を連ねるとともに、文久3年1月の翠紅館会議では、御楯組のメンバーと京都西本願寺別邸の翠紅館に臨み、諸藩の尊王攘夷派有志と將軍徳川家茂の上洛に対する方策や時事を談じている。同年5月の攘夷決行の折には、剛蔵は、幕府を窮地に追い込むために率先して軍事行動を起こし、玄瑞ら光明寺党のメンバーを庚申丸に乗せ、これを指揮して外国船を排撃した。元治元年7月の世子毛利定広の部隊による上京進発の際には、海軍総督として同行し、三田尻から庚申丸・癸亥丸・丙辰丸・壬戌丸で護送する任に当たった。その後は、同月末から約2か月という短期間ではあるものの、藩政の中軸である政務座と蔵元役とを兼務した。長州藩内においては、禁門の変や4国連合艦隊下関事件での敗北の中で、藩内外の危機をもたらした尊王攘夷派への批判が噴出し、その責任を問う形で保守派が台頭した。急進派の中心と目された剛蔵は、肅正の標的とされ、同年12月には野山獄に投じられ斬首された。

こうした松島剛蔵の40年にわたる生涯を辿ると、“藩の武士的ヒエラルキーの末端に位置する藩医が、洋学を身につけ学才を発揮した結果、その道のスペシャリストとして兵家に転じ藩政に参画していく”というプロセスが見えてくる。こうしたプロセスの中で剛蔵の行動を特徴付けたものは、彼の有する二つの人的ネットワークであった。一つ目は、周布政之助ら嚶鳴社の藩学グループとのネットワークである。嚶鳴社の発足当初からのメンバーであった剛蔵は、政之助ら藩学グループと強い結びつきを持ち、政之助が主導した軍制改革を知識面と実践面の両面から支えるなど、西洋兵学者としての実力を遺憾なく発揮することとなった。二つ目は、久坂玄瑞ら松下村塾グループとのネットワークの存在である。剛蔵の次弟の小田村伊之助が吉田松陰の妹と結婚したことから、久坂玄瑞ら松下村塾グループと親密な間柄となり、御楯組を結成して攘夷血盟を行うなど、玄瑞らとともに尊皇攘夷派の急先鋒となるに至った。

一見すると、松島剛蔵が併せ持つ二つの顔、即ち、外国の事情に明るい西洋兵学者として

の顔と、破約攘夷論の先陣を切って行動する尊王攘夷派としての顔とは、相容れないもののように映る。それは、攘夷という行動に対して、「鎖国」体制の維持に固執する時代錯誤的な志向であると見なしたり、事態を正確に認識できない頑迷固陋の無謀な行為であると解したりする向きがあるからである。しかしながら、攘夷主義に基づく行動そのものについては、日本で独自に見られるものではない。中国・朝鮮・ベトナムなどの東アジアの国々においても、19世紀東アジア世界の国際秩序の解体を目論む欧米列強に対し、国家の従属回避のために強力な民族運動を展開させている。つまり、攘夷主義という政治思想は、「国家権力が外圧に対し主体的に対応不可能に陥った時、国家と社会の解体と崩壊の危機意識から必然的に発生する」(宮地正人『幕末維新変革史』上、岩波書店、2012年、126頁)ものなのである。こうした視点に立つ時、“欧米との軍事力の格差を誰よりも認識していた剛蔵が、無謀な攘夷行動の先頭を走ったのはなぜか”、という問いそれ自体が無意味なものとなる。洋学者であることと尊王攘夷派であることとは、そもそも対立軸にはなり得ない。剛蔵が生きた時代と状況・環境下にあるのは、両者は矛盾なく整合していたと見るべきである。

本研究においては、松島剛蔵の攘夷論や政治思想そのものの解明、及びその内在的な分析という段階にまでは至らなかった。これは、剛蔵自身の書簡や述作がほとんど残っていないという、史料的限界に帰するところが大きい。しかしながら、こうした史料的限界を打破するためには、剛蔵を初めとする長州藩尊王攘夷派に強い影響を与えた吉田松陰の政論や洋学観を探ることで、その糸口が見つかるのではないかと考える。今後は、松陰の対外認識とはどのようなものであったのか、どのように洋学への関心を高めていったのか、更には、長州藩の洋学史上、どのような位置付けとなるのか、などの点について明らかにしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

小川亜弥子、松島剛蔵と洋学 - 長州藩洋学者が歩んだ尊王攘夷派への道 -、洋学史学会年報『洋学』、査読有、23号、2016、27-59頁。

〔学会発表〕(計1件)

小川亜弥子、松島剛蔵と洋学 - 長州藩洋学者が歩んだ尊攘派への道 -、洋学史学会大会、2015年9月5日、森鷗外記念館(島根県鹿足郡津和野町)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 亜弥子 (OGAWA AYAKO)
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70274397